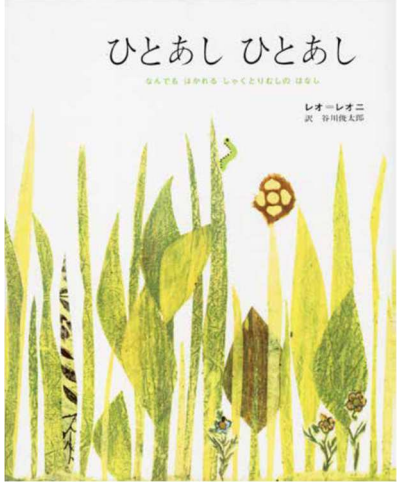
『あおくんときいろちゃん』
Little Blue and Little Yellow,
New York, MacDowell Obolensky, 1959
日本語版：藤田圭雄訳、至光社、1967 年

あおくんはママにお留守番を頼まれますが、仲良しのきいろちゃんと遊びに行ってしまいます。遊んでいるうちにふたりは「みどり」になり、どちらの家族からもうちの子じゃない、と言われてしまいます。悲しくなったふたりは泣いて泣いて、あおときいろの涙になり、またあおくんときいろちゃんになりました。

『ひとあし　ひとあし
なんでもはかれるしゃくとりむしのはなし』
Inch by Inch, New York, Ivan Obolensky, 1960
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1975 年



しゃくとり虫はこまどりに食べられそうになりますが、自分は色々測れて便利なんだと言って助かります。しかしナイチンゲールにわたしの歌を測ってごらん、できないのなら食べてしまうよと言われます。そこでしゃくとり虫は「やってみるよ」と言って、ひとあしひとあし、そしてとうとうどこかへいなくなってしまいました。

『はまべにはいしがいっぱい』
On my Beach There Are Many Pebbles,
New York, Ivan Obolensky, 1961
日本語版：谷川俊太郎訳
ペンギン社、1979 年（絶版）
好学社、2012 年（再版）

普通の石が多いけど、見たこともない不思議な石もある。あなたももっといろんな石を探しに浜辺へ来ませんか？ものがたりというよりも、レオの描いた様々な石が満喫できる絵本です。

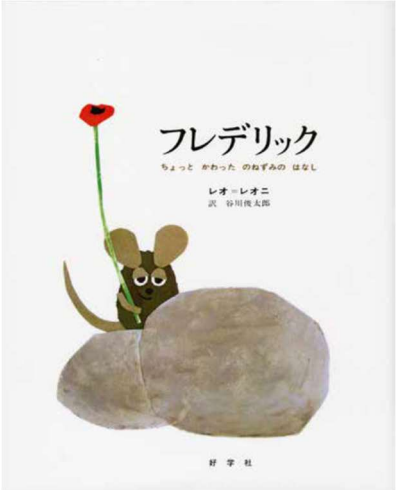
『スイミー
ちいさなかしこいさかなのはなし』
Swimmy, New York, Pantheon, 1963
日本語版：谷川俊太郎訳
日本パブリッシング（好学社）、1969 年

小さな魚のスイミーはたくさんの兄弟たちと暮らしていましたが、ある日、大きな魚にみな食べられてしまい、スイミーだけが生き残ります。その後巡り会った小さな魚たちは、大きな魚に食べられることを怖がって隠れてばかりいます。そこでスイミーは、群れになって泳ぐことで大きな魚を追い払おうと提案します。

『チコときんいろのつばさ』
Tico and the Golden Wings, New York, Pantheon, 1964
日本語版：さくまゆみこ訳
あすなろ書房、2008 年

翼の無い鳥チコは魔法で金色に輝く立派な翼をもらいますが、その途端に仲間たちは離れていってしまいます。そんなとき困っている人々に出会い、チコは自分の羽を抜いて与えます。全身黒い羽になったチコは他の鳥たちにようやく受け入れてもらえますが、心の中で感じること、考えることはみんなそれぞれ違うはず、と思います。

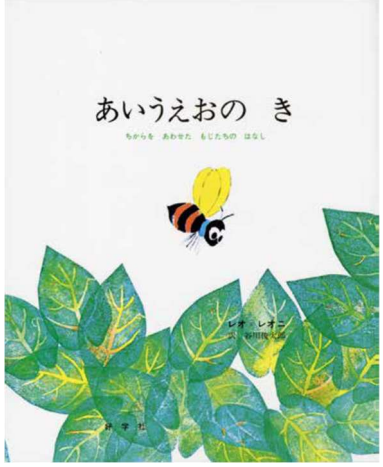
『フレデリック
ちょっとかわったのねずみのはなし』
Frederick, New York, Pantheon, 1967
日本語版：谷川俊太郎訳
日本パブリッシング（好学社）、1969 年



仲間の野ねずみたちが冬に備えて食料を貯えているというのに、フレデリックだけは手伝いません。働いていないのではなく、寒くて暗い冬のために光や色や言葉を集めているのだと言います。やがて冬になり、食べものも尽きてみんなの元気がなく

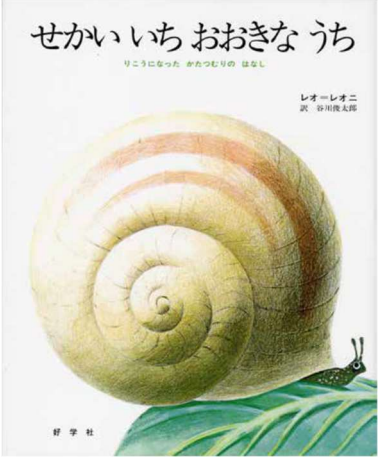
なると、フレデリックはみんなに光や色や言葉のすばらしさを伝えて、元気づけます。

『あいうえおのき
ちからをあわせたもじたちのはなし』
The Alphabet Tree, New York, Pantheon,1968
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1975 年



文字達は葉の上で楽しく暮らしていましたが、嵐を恐れて隠れてしまいます。そこへことば虫がやってきて、言葉をつくる方法を教えます。次に毛虫がやってきて、今度は何か意味のある文を作ってはどうかと提案し、できたのは「地球に平和を、すべての人々に優しさを、戦争はもうまっぴら」という一文です。

『せかいいちおおきなうち
りこうになったかたつむりのはなし』
The Biggest House in the World, New York, Pantheon, 1968
日本語版：谷川俊太郎訳
日本パブリッシング（好学社）、1969 年



チビかたつむりがお父さんに「世界一大きなうちがほしいな」と言います。するとお父さんは昔、そんなかたつむりがいたけれど、引っ越ししようとしてもうちが重すぎて動けなくて、とうとう消えてしまった話をします。そこでチビは、うちは小さくしとこう、大人になったら好きなところへ行けるように、と思います。

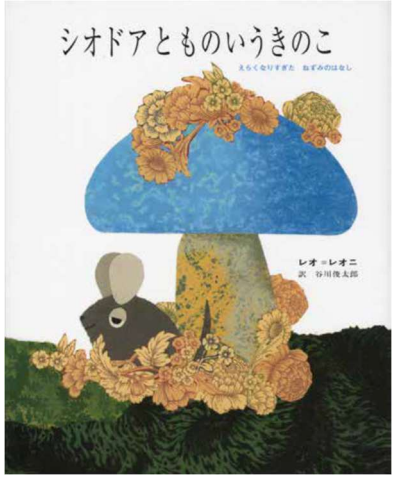
『アレクサンダとぜんまいねずみ
ともだちをみつけたねずみのはなし』
Alexander and the Wind-up Mouse, New York, Pantheon, 1969
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1975 年

ねずみのアレクサンダは、おもちゃのぜんまいねずみのウィリーと友達になります。持ち主にかわいがられるウィリーをうらやんだアレクサンダは、自分もぜんまいねずみになりたいと願います。しかし捨てられたウィリーを見て、自分の代わりにウィリーを本物のねずみに変えてほしいと魔法のとかげに頼みます。

『さかなは　さかな
かえるのまねしたさかなのはなし』
Fish is Fish, New York, Pantheon, 1970
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1975 年

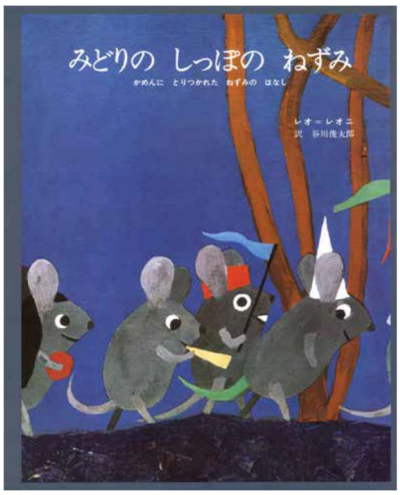
ある池に魚とおたまじゃくしがいて、カエルになったおたまじゃくしは池の外で、鳥や牛や人間を見た話をします。魚は自分でも外の世界を見に行こうと池を飛び出しますが、息ができず動けなくなってしまいます。カエルに助けられ池の中に戻った魚は、そこがどこよりも美しいということに気づきます。

『シオドアとものいうきのこ
えらくなりすぎたねずみのはなし』
Theodore and the Talking Mushroom, New York, Pantheon, 1971
日本語版：谷川俊太郎訳
ペンギン社、1977 年（絶版）
好学社、2011 年（再販）



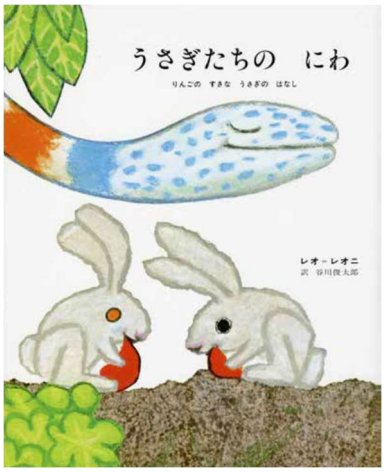
得意技は「逃げること」だと仲間からからかわれていたシオドアは、「クィルプ」と言うきのこを見つけて、自分だけはその意味がわかると仲間たちに言います。しかし、ある日何百ものきのこが「クィルプ」と言っている場所に出くわし、仲間たちはシオドアのうそに気づきます。シオドアは逃げて、二度と姿を現しませんでした。

『みどりのしっぽのねずみ
かめんにとりつかれたねずみのはなし』
The Greentail Mouse, New York, Pantheon, 1973
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1973 年



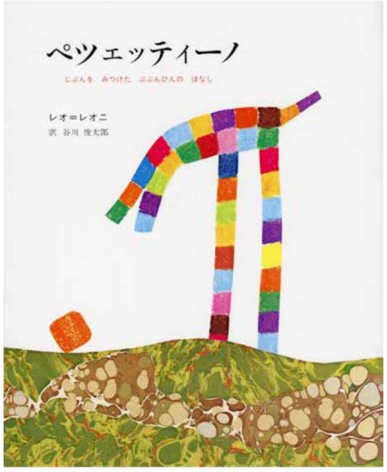
野ネズミたちは、祭りで仮面をかぶると凶暴な動物になったと思い込み、恐ろしいけだもののように振る舞います。そこに別のネズミが現れると、けだものたちはねずみを巨人だと勘違いして逃げ出します。ねずみは、仮面を外せば皆同じになると言い、けだものたちは仮面を燃やし、平和な暮らしに戻ります。しかし一匹のねずみは祭りの時に緑に塗ったしっぽのままでした。彼女は祭りについて聞かれても仮面のことだけは決して話しませんでした。

『うさぎたちのにわ
りんごのすきなうさぎのはなし』
In the Rabbitgarden, New York, Pantheon, 1975
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1979 年



「ニンジンは食べてもいいがリンゴはダメだ」と年寄うさぎに言われる子うさぎ。でもヘビに取ってもらったリンゴを食べて、3 匹はすっかり仲良くなります。驚く年寄うさぎもヘビにりんごをもいでもらうと、「いいさ、リンゴっていうのは大きな丸い光ったニンジンにすぎないんだ」とリンゴを食べました。

『ペツェッティーノ
じぶんをみつけたぶぶんひんのはなし』
Pezzettino, New York, Pantheon, 1975
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1975 年



ペツェッティーノは自分はきっと他の誰かの部分品に違いないと思い、その誰かを探し回ります。するとかしこいやつが「こなごなじまへ行ってごらん」と教えてくれて、そこでペツェッティーノは自分自身も小さな部分品が集まって出来ていると知り、「ぼくはぼくなんだ！」と叫びます。

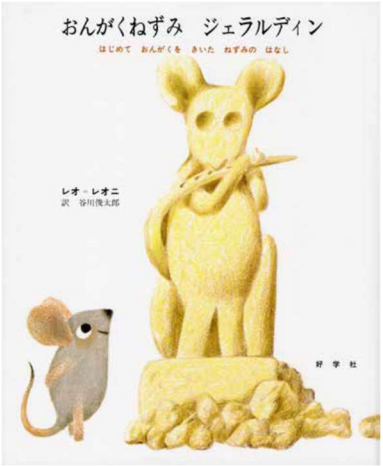
『じぶんだけのいろ
いろいろさがしたカメレオンのはなし』
A Color of His Own, Abelard-Schuman, London, 1975
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1975 年

カメレオンは自分にはどうして決まった色がないのだろう、と悩みます。ずっと同じ葉の上にいれば同じ色のままでいられると思いましたが、葉は秋には黄色から赤になり、落ちてしまいました。そんなとき年上のかしこいカメレオンに出会い、ふたりは一緒に紫になり、黄色になり、赤と白の水玉模様になったりして過ごしました。

『ここにいたい！あっちへいきたい！
にひきののみのはなし』
I Want to Stay Here! I Want to Go There ! : A Flea Story, New York, Pantheon, 1977
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1978 年

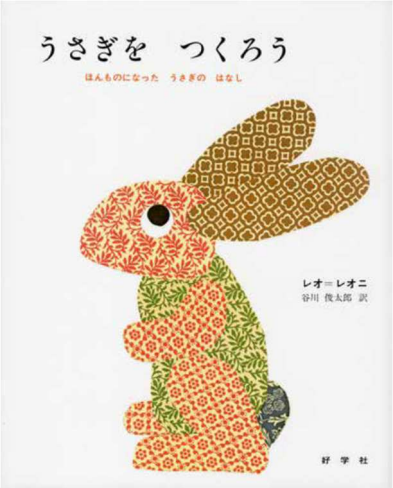
好奇心旺盛な蚤（赤い吹き出し口）と、内向的な蚤（青い吹き出し口）が犬からめんどり、やまあらし、もぐら、かめ、かものからだを渡り歩きます。しかし蚤（赤）が空飛ぶ鳥に飛び移った時、いよいよ蚤（青）はついていくことを断念して犬の毛の中に戻り、そこで蚤（赤）の土産話を楽しみに待つことにするのです。

『おんがくねずみジェラルディン
はじめておんがくをきいたねずみのはなし』
Geraldine, the Music Mouse, New York, Pantheon, 1979
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1979 年



ねずみのジェラルディンは大きなチーズを見つけますが、かじっていると中から大きなねずみが現れ、夜になると聞いたことのない美しい音が聞こえます。「音楽だ！これこそ音楽に違いない！」そしてジェラルディンも自分のしっぽに唇をあてて、美しい笛の音を奏でることができるようになりました。

『うさぎをつくろう
ほんものになったうさぎのはなし』
Let's Make Rabbits, New York, Pantheon, 1982
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1982 年



はさみと鉛筆が２匹のうさぎをつくりました。２匹はお腹が空いたので、ニンジンもつくってもらいました。そのうちまたお腹が空いた 2 匹は、今度は本物のニンジンを見つけ、それを食べたところ、彼らにも本物のニンジンのように影ができます。そして 2 匹ともどこかへ跳んでいってしまいました。

『コーネリアス
たってあるいたわにのはなし』
Cornelius, New York, Pantheon, 1983
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1983 年

コーネリアスだけは生まれた時から立って歩けました。でも他のワニたちは無関心です。コーネリアスはサルから逆立ちとしっぽで木にぶらさがる方法を教わりますが、それでもみんなの反応は「へえ、それで！」

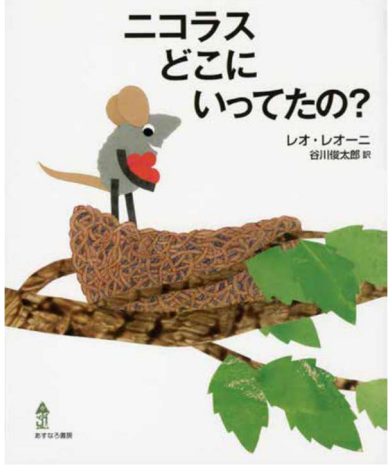
と変わりません。が、ふと振り返ってみると、他のワニたちもやってみているではないですか。

『ぼくのだ！　わたしのよ！
３びきのけんかずきのかえるのはなし』
It's Mine!, New York, Alfred A. Knopf, 1985
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1989 年

けんかばかりしている 3 匹のかえるに、いい加減にやめてくれ、と大きなヒキガエルが言いにきます。そこへ突然大雨が降ってきて、なんとか残った岩にみんなで避難しますが、水が引いてみるとそれはあのヒキガエルでした。「助けてくれたんだね！」と 3 匹は叫びます。それ以来 3 匹は一緒に過ごし、幸せを感じました。

『ニコラスどこにいってたの？』
Nicolas, Where Have You Been?, New York, Alfred A. Knopf, 1987
日本語版：谷川俊太郎訳
佑学社、1988 年（絶版）
あすなろ書房、2009 年（再版）

ニコラスが野いちごを捜しに出かけ



ると、大きな鳥につかまり、必死にもがいて 3 羽のひなたちの巣に落っこちます。仲間たちに何があったのかを話していると、鳥たちが熟れた野いちごを持ってきてくれました。レイモンドおじさんがみんなに言います、「１羽の悪い鳥だけで、全部の鳥を悪いと決めつけちゃいけない」と。

『６わのからす』
Six Crows, New York, Alfred A. Knopf, 1988
日本語版：谷川俊太郎訳
佑学社、1989 年（絶版）
あすなろ書房、2009 年（再版）

農夫の麦畑で 6 羽のからすが麦をついばむので、農夫は案山子をたてました。からすも鳥の形の凧をつくったので、農夫はもっと恐ろしい案山子をたてましたが、からすたちももっと大きくて恐ろしい凧をつくったので、農夫は小屋にこもってしまいます。一部始終をみていたふくろうが、農夫とからすたちに、話し合う

ように勧めます。

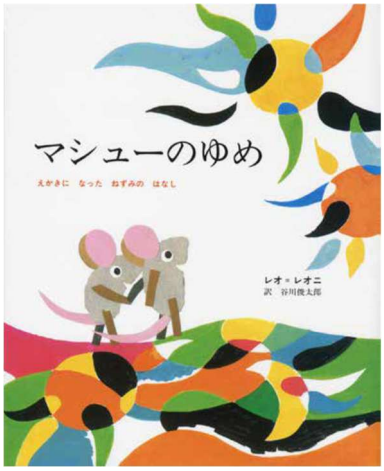
『どうするティリー？』

Tillie and the Wall, New York, Alfred A. Knopf, 1989
日本語版：谷川俊太郎訳
佑学社、1990 年（絶版）
※当時の邦題は『ティリーと壁』
あすなろ書房、2002 年（再版）

壁の向こう側はどんなだろう、しかし壁は高く、硬く、終わりも見つかりません。そこでティリーは穴を掘り始めます。そして壁の向こう側にいたのは、なんと自分と同じ、普通のねずみたちでした。ねずみたちは互いに行き来するようになり、そしてそれはティリーのおかげだということを決して忘れませんでした。

『マシューのゆめ
えかきになったねずみのはなし』

Matthew's Dream, New York, Alfred A. Knopf, 1991
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1992 年



ねずみのマシューは美術館で夢中になって絵をみていると、ニコレッタと出会います。その晩、マシューは夢の中でニコレッタと素晴らしい絵の中を歩いていますが、目を覚ますと寂しくなったマシューの目に涙がたまります。すると急に目の前のガラクタがやわらかく滑らかに見えてきて、そして、マシューは絵描きになるのです。

『いろいろ１ねん』

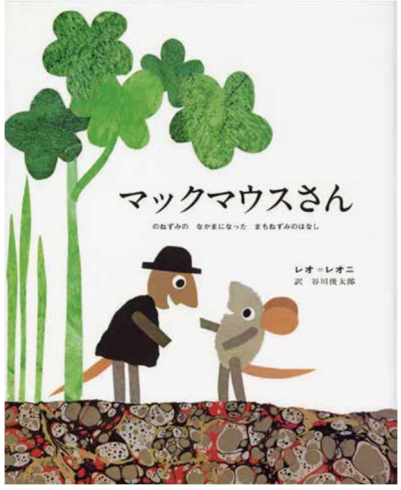
A Busy Year, New York, Alfred A. Knopf, 1992
日本語版：谷川俊太郎訳、あすなろ書房、2000 年

ふたごの子ネズミのウィリーとウィニーは、1 月に雪の中でウッディという木に出会い、友達になります。５月にはウッディに花が咲き、９月になると果物をいっぱいに実らせ、２匹にも食べさせてくれました。12 月にはウッディへのクリスマスプレゼントに、ウィニーからは肥しを、ウィリーからは球根や花の種が贈られます。

『マックマウスさん
のねずみのなかまになったまちねずみのはなし』

Mr. McMouse, New York, Alfred A. Knopf, 1992
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、2010 年

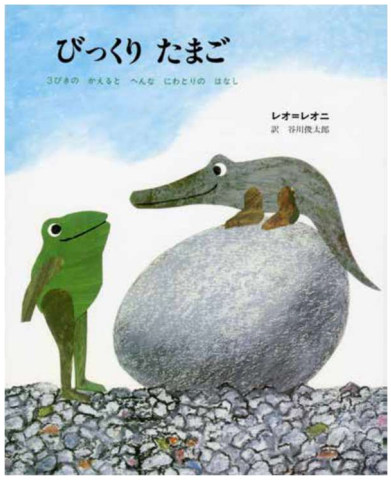
ティモシーはある日突然人間のような姿になってしまい、驚いて街から逃げ出します。スピニーにのねずみの免許を取るよう勧められますが、テストの最中に猫が現れます。しか



しティモシーの機転で逃げ出すことができ、その勇気をたたえて、ティモシーには名誉のねずみ免許証が、スピニーには特別メダルが授与されました。

『びっくりたまご
３びきのかえるとへんなにわとりのはなし』

An Extraordinary Egg, New York, Alfred A. Knopf, 1994
日本語版：谷川俊太郎訳、好学社、1996 年



かえるのジェシカが白くてまん丸な石ころを持ち帰り、物知りのマリリンがそれはニワトリの卵だと言います。その後、卵からかえったニワトリをお母さんに返しに行ったジェシカは戻ってから仲間たちに、お母さんが「わたしのかわいいワニちゃんって言ったのよ！」、なんてばかなことを、と 3 匹は大笑いするのでした。